

年頭のごあいさつ

林産試験場長 及川弘二



新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、清々しい新年をお迎えのことと存じます。

旧年中は、林産試験場に頂きましたご理解ご協力に、心からお礼申し上げます。

昨年は、秋田県や中国・九州北部地域などで、気候変動を想起させる集中豪雨により大きな災害が起きました。罹災された皆様方には、衷心よりお見舞い申し上げますとともに、早急な復興をお祈り申し上げます。本道では、一昨年のような大きな気象災はありませんでしたが、サケやサンマの漁獲が減少するなど、自然環境が変化していると感じさせる年でした。また、本道上空を飛行体がかすめるなど、不安定な社会情勢でもありました。一方、我が国経済は景気の拡大が続き、高度経済成長期の「いざなぎ景気」を超える戦後2番目に長い景気となり、木材の取引も活発で、林業・木材産業においても堅調に推移しました。このような中、利用期を迎えた道内の森林資源の循環利用を確実に進めていくためには、一つでも多くの新たな利用方法を開発し、道産材の需要を拡大していく必要があります。

昨年、林産試験場では、民有林の主力造林樹種であるカラマツを、建築材としての利用を広げるため、これまで正角材に限られていた乾燥技術であるコアドライを平角材に応用する技術を開発し、北海道木材産業協同組合連合会に提供しました。既に2企業において平角コアドライの生産に向けた準備が行われ、住宅1棟まるごと道産カラマツ材で建築できる体制が整いました。トドマツについても、トドマツ圧縮材フローリングを町営の保育所建設に採用して頂き、公共建築物では初めての施工が実現しました。今後、利用状況の把握などのフォローアップを図っていきますが、本格需要への期待が膨らんでいます。木材の成分利用の分野では、シラカンバを肉牛の粗飼料として利用する試験研究を進め、牛の嗜好性が高く生育状況も良好なことから、マスコミにも取り上げられ企業からの照会も寄せられました。きのこでは、道産子きのこのマイタケ「大雪華の舞1号」を乾燥させた製品が、北海道の食品機能性表示制度「ヘルシーDo」に認定されるなどしました。また、世間の耳目を集めているCLTについては、道内初のJAS認定工場の誕生を受け、意匠性に配慮した接合部の構造実証試験等を行い、この接合技術を使った町営の研修・宿泊施設の建設が進められており、CLTの生産・利用技術の向上に向けて確実に取組んできたところです。

2017年は、AI元年ともいわれました。人工知能・AIの製品化、社会実装が進み、自動車の衝突回避システムは標準化され、自動運転車の実用化も加速的に進展しています。単純作業を行うロボットから「アシモ」や「ペッパー」など考えるロボットへ、様々な作業現場でAIの導入を想定した開発が進められ、昨今では、会議に代理出席するロボットなどの研究も進められているやに聴きます。林業・木材産業の分野でも、ICTを活用した木材流通のネットワーク化の検討も行われており、今後は製造業で驚くような技術革新が進むものと予想されます。AIを搭載したハーベスターが伐採データを機械学習し、林況に応じた伐採や採材方法を自動で判断、伐採データと対となる製材加工データの分析により、立木や丸太の品質や用途が瞬時に示される、といった日もそう遠いことではないのかもしれません。

2018年は、林産試験場が北海道立総合研究機構の一員となって9年目、第2期中期計画の4年目にあたります。現計画の集大成として、戦略的に食関連産業の振興や木質バイオマスのエネルギーとしての利用に向けた試験研究と、木材の利用拡大に必要な流通加工体制の整備と需要の創出に林業試験場と一体となって取組むとともに、第3期中期計画の展開を見据え、業界のニーズと将来を先取りした課題を的確に把握するなど、林産試験場の総力を挙げて本道の林業・木材産業に貢献していきます。

「林業の成長産業化」が、国の方針として掲げられてから5年余りが経ちました。早く「化」がとれて、林業・木材産業が山村地域を次世代に継承するよう取組んで参りますので、本年も林産試験場へ変わらぬご支援ご協力を頂きますようお願い申し上げます、新年のご挨拶といたします。